

2021年1月23日

年間第3主日（神のことばの主日）

菊地功大司教 メッセージ

「イエスはガリラヤへ行き、神の福音をのべ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」

マルコ福音書はその冒頭で、洗礼者ヨハネの出現を伝え、さらにイエスの洗礼について述べた後、荒れ野における四十日の試練に簡潔に触れています。そしてその直後に「ヨハネが捕らえられた後」として、イエスが神の福音を宣べ伝えたと記します。本日の福音朗読です。すなわち、「神の言」の受肉であるイエスは、その本性からして福音そのものであり、存在すること自体が神の福音のあかしでありますから、当然、福音を宣べ伝えることがイエスの公生活を根底から支える礎であると明確に示しています。

さらにマルコ福音書は続けて、イエスがガリラヤ湖のほとりでシモンとアンデレを弟子として召し出された話を記します。すなわち、福音を宣べ伝える業を、イエスはその最初から共同体の交わりの中で行ったのだと記すことで、福音宣教は教会にとって本質的な働きであり、なおかつ共同体の業であることを明示しています。

「私についてきなさい。人間をとる漁師にしよう」と言われて弟子を召し出される主は、その「人をとる漁」なるものを、突拍子もない驚愕的な業を持ってするのではなく、地道だけれど徹底した福音のあかしによって行うのだということ、マルコ福音書は、すべてを捨てて主イエスの働きに身を投じる弟子の姿を記すことで明らかにします。わたしたちの信仰は、神の言葉の存在とその宣言抜きには考えられない信仰です。

教皇フランシスコは2019年9月に、使徒的書簡「アペリット・イリス」を発表され、年間第三主日を、「神のことばの主日」と定められました。今年は1月24日が、「神のことばの主日」であります。

教会は、聖書と共に、使徒たちから伝えられた「信仰の遺産」である生きている聖伝も大切にしています。カテキズムは、「どちらも、『世の終わりまで、いつも』弟子たちと

ともにとどまることを約束されたキリストの神秘を、教会の中に現存させ、実らせるもの」だと指摘しています (80)。

それを前提として教皇は、「神の言」の重要性を指摘する聖ヒエロニムスの言葉、「聖書についての無知はキリストについての無知である」(聖ヒエロニムス『イザヤ書注解』)を引用します。

その上で教皇は、「聖書のただ一部だけではなく、その全体がキリストについて語っているのです。聖書から離れてしまうと、キリストの死と復活を正しく理解することができません」と指摘します。

第二バチカン公会議の啓示憲章も、「教会は、主の御からだそのものと同じように聖書をつねにあがめ敬ってき〔まし〕た。なぜなら、教会は何よりもまず聖なる典礼において、たえずキリストのからだと同時に神のことばの食卓からいのちのパンを受け取り、信者たちに差し出してきたからで〔す〕」(『啓示憲章』 21)と記して、神のことばに親しむことは、聖体の秘跡に与ることに匹敵するのだと指摘しています。

わたしたちはシモンとアンデレのように、今日、「私についてきなさい。人間をとる漁師にしよう」と召し出されています。それぞれの生きる場で、神のことばをあかしして生きるように、招かれています。その招きに答えるために、わたしたちは、日頃から、また典礼祭儀において、神のことばに耳を傾け、慣れ親しみ、自らの心にそれを刻み込んでおきたいと思います。